



JEG ニュースレター 179号

www.jegschweiz.com

2021年4月24日

小さな証

パンデミックの最中にスイス・バーゼルに留学した若き音楽家が試練のなか主から受けた恵みと導き、。P2

東日本大震災から10年

世界を震撼させた東日本大震災。被災者として救援者として過酷な現実立ち向かったキリスト者の胸に去来する思いとは、。 P4-P5

召天から1年

佐々木千恵子姉の優しい笑顔が見れなくなって4月2日で早一年。いまでも人々の心の中に生きる千恵子姉の証と数々の思い出。 P6-P8

また会う日まで

ウィーンとウィーン日本語教会をこよなく愛してこられた岡崎信吾画伯への愛に満ちた追想文です。P9-P10



ちいさな祈り

天のおとうさま
きょうのあなたのみことばが
わたしたちの血肉と霊の中に刻み込まれ、
わたしたちに息吹きを与え、
主をほめたたえる者として、
きよめてくださいますように。

"わたしはあなたがたに平安を残します。わたしの平安を与えます。わたしは、世が与えるのと同じようには与えません。あなたがたは心を騒がせてはなりません。ひるんではなりません。"
ヨハネの福音書 14章27節

東スイス・ゼーアルプ湖とアルプシュタイン 2021年3月30日撮影



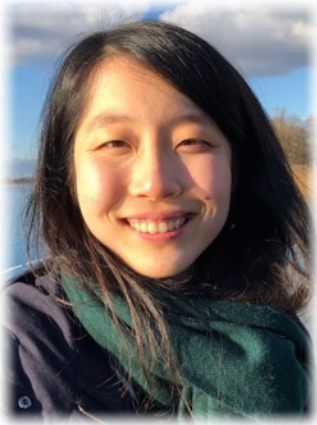
特別な任務と役割を担う欧州の日本語教会／集会は、一教会一集会といった小さな枠を超えて、一つの神の家族として、ともに喜び、ともに重荷を負い、ともに泣き、祈り合い、響き合う共同体であれと、神様は私たちに願っておられます。

ちいさな証

これまでの恵みを思い起こして

井ノ上歌歩

スイス日本語福音キリスト教会



昨年八月末に留学を始めてから、七か月が経とうとしています。語学力はままならず、音楽性も未熟なわたしが、ここまで留学生活を続けてくることができたのは、ひとえに、神様のあわれみと恵みによります。主の御名を心からほめたたえます。

JEGの礼拝に出席したのは、ちょうど今から二年前でした。三月の第四聖日だったと思います。パーゼル音

楽院への留学を考え、下見に来た時のことでした。礼拝で、マイヤー先生が熱くイスラエルについてお話しされていたのを覚えています。JEGの皆さんが温かく迎えてくださり、もしわたしがスイスで勉強することを神様が許されるなら、この教会に通うことになるのだろうなと思っていました。

それから時が経ち、日本の大学を卒業して、パーゼル音楽院への録音審査とオンライン面接に臨みました。ちょうどその頃、コロナの影響が世界中に広がっていった時期で、先のことには不安でしたが、自分が一番勉強したいと思っていた学校で学べることが決まり、主のあわれみを感じずにはいられませんでした。コロナのことがあり、本当に留学できるのか出国直前までわかりませんでした。元気に飛行機に乗り、なんとかパーゼルまでたどり着いて、留学生活がスタートしました。

わたしはクリスチャンの両親のもとで育ちました。小学四年生の時に、夏の教会のキャンプで洗礼を受ける決心をし、その年のクリスマスに洗礼を受けて、信仰の歩みが始まりました。教会に同世代はほぼいませんでしたが、ユース向けのキャンプに参加

したり、高校では不思議とクリスチャンの同級生が与えられたりしたことを通して、日常の中で神様と向き合うこと、進路選択や受験という人生の大きな局面でも神様に信頼することなどを、少しずつ教えられてきました。

今回の、パンデミックのさなかに始まった留学生活ですが、これまでわたしの人生を導いてくださった神様は、スイスの地でも同じように、あわれみ深いお方でした。生活環境を整え、たくさんの尊敬する方々との出会いを与え、わたしが疲れ果てて倒れることがないように、主はたくさんのセーフティーネットを張ってくださいました。特に、JEG、パーゼルのインターナショナルチャーチ、バイブルスタディーグループ、学校でのクリスチャンたちとの出会いに、霊的、また精神的に、そして体力面においてさえ、支えられました。すべてが新しい環境の中で、ストレスを感じる場面も少なくなかったと思いますが、この半年間を振り返って思い浮かぶのは、感謝だったことばかりです。

努力することが本当に苦手なわたしですが、主が与えてくださることにひたすら感謝を持って受け取り、信頼し続けていきたいと思えます。留学生活一年目を最後まで乗り越えられるかまだわかりませんが、約束を果たされる主にのみ期待をもって、歩みたいです。

「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」さらに言われた。「あなたの子孫は、このようになる。」アブラムは主を信じた。それで、それが彼の義と認められた。(創世記 15:5)



1. デュベンドルフにおける対面による礼拝が再開。



昨年10月11日からパンデミックの第2波により、会堂における礼拝が再度出来なくなり、3月28日まで止む無くテレビ会議システムZoomによって、オンラインで礼拝がささげられてきました。しかし4月11日には半年ぶりに対面で礼拝を捧げられるようになりました。

半年ぶりにデュベンドルフの会堂での礼拝は、マスクで顔の半分を隠し、賛美は出来ず、お互いの距離を大きくとってといった多くの制約のなかでの礼拝でしたが、集まって対面で礼拝のできる恵みに参加者40名は感激いたしました。また、初めての試みでZOOMによって同時中継をいたしました。現地にお越しになれない

スイス、ドイツ、チェコ、アラブ首長国連邦などから17名の兄弟姉妹にもご参加いただきました。

当日の招待講師であるWüst Hans 元牧師による、シンプルしかし暖かで力強いメッセージ”神の協力者”の録画をアップロードしましたので、スイスJEGのホームページからご視聴ください。https://



www.jegschweiz.com/

2. CSオンラインイベント”飾り巻き”



オンラインCS子ども会を、毎日曜14時から開いてきたCSチームは、4月17日(土)午後、zoomにて親子で飾り巻きを作ろう!というCSのイベントを催しました。参加者は講師のヘス姉を含め

て14人でした。巻き寿司に赤、黄、緑色の具を巻き込んで花びら型にして可愛いお花形に並べて、とっても綺麗なお寿司のお花ができました。最後はみんなで見せ合いっこ。子ども達にも簡単に作れて一緒に楽しみました。 トムセン千香子

3. 岡崎信吾画伯が天に召されました。

ウィーン日本語教会の創立とその成長に深く関わっていただいた岡崎信吾(画家、元日本語学校美術教師)が、3月21日、朝6時頃、ウィーンの介護施設から兄の故郷である天の御国に旅立たれました。イエス様の側で、痛みと苦しみから解放され慰まれる画伯の優しいお姿を想います。享年八十三。これまでの欧州の信仰の友に

よる真摯なお祈りを感謝します。日本とウィーンに遺されたご遺族に主の格別な慰めが注がれますよう引き続きお祈りください。幸い。

ニュースレター8/9ページに、画伯の深い信仰と柔和なお人柄に惹かれたご友人による追想文を掲載いたしました。



岡崎画伯 2015 プラハで

4. 田辺正隆先生が退院されました。

1月25日(月)心筋梗塞を起こされた田辺正隆牧師は奥多摩病院に搬送され、闘病されていましたが、順調に回復され、リハビリを経て、4月7日(土)に退院されました。以下は、田辺みや子夫人からの礼状です。

皆様にお祈りいただいています主人ですが、今日、病院より連絡があり、今週の土曜日4月7日に完全退院することとなりました。主にこの様なお計らいをして頂き、改めて主が素晴らしいお方でいらっしゃることを覚え、主の御慈愛にただただひれ伏し賛美を捧げます。皆様のお祈りにも心より感謝いたします。月曜日からは主人の自宅での療養に備えてスロープの取り付けなどの工事が始まります。引き続きお祈りをよろしくお願いいたします。

5. 第38回キリスト者の集いの申し込みが締め切り

7月29日から仏ストラスブールにおいて開催予定の第38回ヨーロッパ・キリスト者の集いへの参加申し込みは3月15日に締め切られました。この予測不能の困難な状況にあって150名もの参加申し込みを頂いたのは誠に感謝です。準備をすすめる実行委員会は4月24日に11回目のミーティングを持ちます。開催時期の感染状況が予測できないため、ネットによる開催も視野に計画を進めています。

集いに関する最新情報は、HPに随時アップロードされますので時折ご訪問ください。

6. ユースのPodCast(インターネットラジオ)



第38回ヨーロッパ・キリスト者の集いの中

高生・ユースプログラムの紹介のため、集い2021のユーススタッフの広報チームがPodcast(インターネットラジオ)を作り、過去の集いの中高生・ユースプログラム参加者の声を配信してくれています。 <https://open.spotify.com/show/TyngNCJ7XqOHTXZQRAOaJ>

集いに参加した若者たちの率直な感想が聞け、中高生・ユースプログラムの雰囲気がよく伝わる秀作です。今後はユースプログラムの講師の先生たちの声も配信する予定だそうです。このPodcastはキリスト者の集いのHPにもアップしてありますので、お時間のあるとき、ぜひ若者たちの率直な生の声をお聴きください。

7. 世界各地からホットな情報が満載の月報/ニュースレター&メルマガが届いています!

工藤篤子メルマガ、井野葉由美メルマガ、吉村美穂NL、バルセロナ日本語で聖書を読む会月報、デュッセルドルフ日本語キリスト教会月報、ケルン・ボン日本語キリスト教会月報、ルーマニア川井勝太郎宣教師の週報、イザール通信、森ゆり空レタ配達人、”宣教の声”が届いています。お読みにになりたい方は、松林までご連絡ください。なお、スイスJEG会員の兄弟は、HPでパスワードを入れ、いつでも閲覧可能です。

東日本大震災から10年、私の胸に去来する想い



瓦礫と化した仙台市沿岸地帯

被災者でありながら

菊池祥彦

豪州アデレード在住



一つの大きな節目に際し、日本では震災関連のニュースや番組がたくさん流れていたと思います。

私はオーストラリアに住んで

るので、震災関連のニュースは読むことはあっても、映像を観ることはありませんでした。正直なところ、震災の映像を観る気持ちにはなれませんでした。

日本全国で、改めて震災のことが覚えられる中、私は震災のことを避けてる自分に気づきました。あの、とても大きな出来事とそれに伴って降りかかってきた様々な事が、まだ自分自身の中で整理がついていなかったのだと思います。

自分自身被災者でありながら、支援活動に奔走しました。震災によって、自分の計画が変わり、落ち着いて考える暇もなく、日々は過ぎていったように思います。自分にとって、あの震災とは何だったのだろうか…。まだまだ整理がつかず、積極的に思い出したくもない、“ぐちゃぐちゃ”になったまま残ってる震災の記憶。

今回の寄稿に際し、全てのことを働かせて益としてくださるお方を通して、このことをどのように考え、受け止めたら良いのかを改めて考えました。すぐには整理がつくことではありませんが、自分の中ではっきりとしていることは、震災があったから、多くの人に出会うことができたということです。

東北沿岸部に住む方々、国内外から来た多



津波で流された教会跡に立つ

くのボランティアの方々、震災支援を呼びかけに行った先の教会のみなさん、他の地域で支援活動をしていたスタッフの方々、そして私にとって最も貴重な出会いは妻との出会いでした。妻との出会いがあったから、息子が与えられ、今の家族があります。これは震災を通して与えられた測り知れない恵みです。

私たちの記憶は、全てが美しいことではありません。時に、思い出したくないことがあります。でも、神様は、私たちが目を向けたくないような事の中でも働かれ、私たちに恵みを与えてくださるお方です。神様は、ご自分が最も目を背けたいキリストの十字架という出来事を通して、測り知れない恵みを生み出されました。

今、震災を振り返るときに、自分の中でぐちゃぐちゃになってしまってる出来事の真っ只中にあっても、主は働かれ、私を導き、励まし、訓練し、私に多くの恵みを与えてくださいました。

そんな主に心からの感謝をお捧げします。また、私たちの支援活動を覚え、祈り、サポートして下さった皆さまにも心から感謝いたします。

非日常の中で

黒田閑恵

チェコ在住



10年前のその日、私は父の入院で帰国して埼玉県草加市に住んでいました。3時前に始まった揺れがだんだん大きくなり、病室の天井からパラパラごみが落ち始め、自力で歩けない父はベッドで動けず、私の頭は1分先5分先はどうしようかといっぱいでした。



草加市は東北のような大きな災害はなかったものの、この日から非日常が日常となりました。電車は止まり、多くの店は閉まり、計画停電がありました。

この非日常の中で、知らない人どうしが助け合うことが日常となったと思います。当日電車の止まった帰路を遠くまで歩かなければならぬ見知らぬ人に、自転車を貸したりすることが自然にできたのです。その頃通っていた草加福音自由教会では、道路が通れる限り、何度も義

援物資を積んだワゴン車が東北へ向かいました。駅前や公園で、おそらく町内会の若者たちが義援金、物資を集め、立ち働いていた姿をよく見かけました。困ってる誰かのために働けることに生き生きしている様子だったことを思い出します。非日常が日常になっていた日々、たいていの日本人は本当に健気だったと思うのです。

東北地方の大災害や福島原発事故のことは、大きすぎ重すぎ、今も何を話せばよいのかわかりません。病室のテレビに次々映る災害地の映像を、父は第二次大戦時の東京空襲と混同していたようで、外の世界は全く壊れてしまったと感じていた節があります。

3.11の一ヶ月前に病床洗礼を受けた父は、3.11の二週間後に天に召されました。間に合ってよかったと、心の底から思いました。

これを書くにあたり当時を思い起こすと、次々と記憶がよみがえります。よい機会を与えてくださいました。全てを神さまは見ておられ共におられたので、私達はまた次の一步を踏み出すことができた信じます。そして、教会の高尾牧師ご夫妻、兄弟姉妹に助けられて、あの非日常を乗り越えることができた、あらためて感謝の気持ちでいっぱいになります。

ご参考までに。原発事故の後、風向きによって、雨に放射性物質が含まれると天気解説で言われても、よく小雨の中を自転車で走りましたが、今もまったく元気でおります。

東日本大震災から10年、私の胸に去来する想い



気仙沼にて

神はわれらの避け所

モニカ・ブルツェル
ドイツ・ショプフハイム在住

Am 11. März 2021 gedachten wir an die 10. jährige Katastrophe in Fukushima im Jahre 2011.

Ich konnte im Rahmen der Deutsch-Japanischen Gesellschaft Freundeskreis Nagai-Bad Säckingen einen Vortrag über meine persönlichen Erfahrungen dazu halten. Man kann es auf youtube finden. (<http://www.djg-nagai-saeckingen.de/>)

Im März 2011 war ich als Dozentin in Nagoya am Toukai Theol Seminar tätig und wollte sofort nach der Katastrophe im Erdbebengebiet helfen.



モニカと
東海聖書神学校
の生徒

Es gab eine Möglichkeit als Helfer über die Organisation „Food for the hungry“ nach Sendai

zu fahren und von dort aus konnte ich in Ishinomaki bei ersten Not-Einsätzen dabei sein. Das war eine sehr intensive und wichtige Erfahrung, denn so konnte ich direkt von der schlimmen Situation vor Ort meinen deutschen Freunden berichten und es gab viele Spenden aus Deutschland.

Einen Monat später konnte ich sogar mit ca 20 Schülern des TTS zu einem weiteren Helfer- Einsatz fahren. Es waren vor allem Aufräumarbeiten notwendig. In einer Baptisten-Gemeinde in Kesenuma veranstalteten wir jeden Tag Waffelkaffee und haben die Menschen in der Nachbarschaft stärken und ermutigen dürfen. Auch konnten wir ihnen täglich Hilfgüter aller Art aus Sendai vorbeibringen. Für mich und meine Studenten war das eine ganz besonders erfahrungsreiche Zeit. Notleidenden

helfen zu können ist ein biblisches Privileg.

Zwei Jahre später hat Gott für mich eine Tür in die Daiichi Baptistchurch in Fukushima, der Gemeinde von Pastor Akira Sato aufgetan, wo ich vor Ort als Missionar drei weitere Jahre evangelistische Aufbauarbeit vor allem durch Kontakte und mit Englisch Unterricht leisten konnte. Wegen meiner kranken Mutter musste ich die Arbeit dann unterbrechen und habe sie in Deutschland zwei Jahre gepflegt. Im Januar 2020 ist sie verstorben und seither ist Corona.

In der Zwischenzeit habe ich auch hier in Deutschland einige schöne Kontakte zu Japanern aufbauen dürfen und drei Jahre lang an der VHS Japanischkurse gegeben. Auch bi ich in regelmäßigem Kontakt mit meinen Gemeindegliedern in Japan durch Online - Bibelstudium. Leider habe ich derzeit mein Langzeitvisum für Japan verloren. Dennoch hoffe und bete ich, dass ich bald wieder nach Fukushima (Izumi) in die Gemeinde zurück kann. Dankbar wäre ich, wenn sie mit dafür beten könnten. Herzlichen Dank.

(Monica Bruttel, D-Schopfheim)



主のみ名を賛美いたします。どんなに苦しく難しい状態であっても、主イエスは私たちを導いて助けてくださる方です。それを心から信じています。

詩篇 46: 1 「神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。」

2021年3月11日、2011年の福島原発事故から10周年を迎えました。私は日独協会 Freundeskreis Nagai-Bad Säckingen の一環として、これに関する私の個人的な経験について講演を行うことができました。これは youtube で

ご覧いただけます。 (<http://www.djg-nagai-saeckingen.de/>)

2011年3月、名古屋の東海聖書神学校で講師をしていた私は、震災直後の被災地を支援したいと考えていました。

「Food for the hungry」という団体のヘルパーとして仙台へ行く機会があり、そこから石巻での最初の緊急ミッションに立ち会うことができました。

その後、現地のひどい状況をドイツの友達に直接報告でき、ドイツからの寄付がとても多かったことなど、非常に濃密で重要な経験となりました。その一カ月後には、名古屋東海聖書神学校の学生20人ほどと一緒に別の援助活動にも参加することができました。必要とされたのは主に清掃作業でした。

気仙沼のバプテスト教会では、毎日ワッフル・コーヒーを企画し、近隣の人々を強め、励ますことができました。また、気仙沼から日々の様々な救援物資を届けることができました。これは、私と生徒たちにとって、とても特別な時間でした。困っている人を助けることができるのは、神様に与えられた特権です。

その2年後、神様は私を福島第一バプテスト教会（当時、主任牧師は佐藤彰牧師）へと扉を開いてくださいました。そこで私は更に3年間、宣教師あるいは外国人として現地で人々との接点や英語の授業を通じた伝道活動の仕事をすることができました。

2018年に病気の母のために仕事を中断し、2年間ドイツで母の世話をしました。2020年1月に母は亡くなり、それ以来コロナ感染が拡大しました。その間、私はドイツに住んでいる日本人との交流を深めることができ、文化センターで2年半、日本語の授業を行いました。その上、福島第一バプテスト教会のメンバーとは、オンラインで聖書研究をし定期的に連絡を取り合っています。

残念ながら、私は現在、日本への長期滞在ビザを失っています。しかし、なるべく早く福島（泉）に戻るよう祈っています。このために一緒に祈っていただけるとありがたいです。どうもありがとうございました。

わたしたちの佐々木千恵子さんが2020年4月2日の朝に召されて一年。そのあと、千恵子さんの「小さなお証」を紹介させていただきましたが、御主人アンツカさんからドイツ語訳をいただく恵みにあずかりました。「ドイツの人にも伝えたい」が千恵子さんの願いでした。(ドイツ語版はNLに添付いたします。)最愛の伴侶アンツカさんとともに、千恵子さんとその信仰を思う時とさせていただきます。キリストの愛に満ちあふれ、優しさに包まれた千恵子さんの笑顔の思い浮かべつつ。

シュトゥットガルト日本語教会

「ちいさなお証」 佐々木千恵子

子どもの頃から国語が大の苦手、文章を書くことに、すごく劣等感があるのですが、聖霊さまのお力に頼って書いてみます。山田稔&綾子先生に感謝、子ども伝道・イエスさまの種まきに感謝。40年たって芽が出ました。ひばりが丘教会の日曜学校でイエスさまのことを聞きました。それから40年をすぎて、遠い南ドイツの田舎で芽が出て、カトリック教会で洗礼を受けました。近所の子供達と群れになって、おたまじゃくし池のある教会に、それから現在の地に移ってから、みんなで楽しく通っていました。

先生の紙芝居、「タイタニック号」の紙芝居、「おばけのこちゃん」のお話、子どもさんびか「空の鳥は小さくても」「主われを愛す」「子どもの好きな」などなど、心がきらきら透き通って、爽やかな気持ちで教会を出た感覚を今でも覚えています。毎回頂く「みことばカード」をせっせと集めていました。クリスマスのキャロリングもすごく楽しかったです。山田



先生が「君たちが大人になった時、先生!って誰か来てくれるかな?」とお話された時に「ぜったい連絡しよう!」って思ったのでした。導きあって2002年にドイツの教会でカトリックの洗礼を受けた時、どうしても山田先生ご夫妻にお知らせしたい、とインターネットでひばりが丘教会の電話番号を探して、めでたくお伝えすることができました。

山田先生ご夫妻が子ども伝道に使命を持たれ、ひばりが丘教会が生まれ、一生懸命にお働き下さったので、私のいのちが救われました。山田先生ご夫妻とご家族に心から感謝しています。そして、ひばりが丘教会を支え続けてこられた信徒の方々に心から感謝しています。群れになって、当時一緒に教会に通った近所の友だち、みんなに蒔かれたキリストの種が50年70年と経ってからも、みんな芽が出て、キリストの救いに与れますように! アーメン。



千恵子さんが
天に還られてから1年

千恵子さんが感謝・敬愛してやまない山田稔牧師は、奇しくも千恵子さんと同じ日に91歳で召されました。二人は一緒に神さまに呼ばれました。「良い忠実な僕よ、良くやった。救い主がお迎えだ」と。こうして、福音の証人二人は、手を取り合って、み国へ凱旋して行きました。その日4月2日の聖句(Tageslösung)には、このようにあります。詩篇71:17「神よ、私の若い時から、あなたが常に教えて下さるので、今まで私は、驚くべき御業を伝えてきました。」ルカの福音書 2:28-30「シメオンは、幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。」

聖句のとおりでした。ハレルヤ!
(ほめたたえましょう、主を)

千恵子さんに伝えたかったこと

真壁かおる

スイス日本語福音キリスト教会

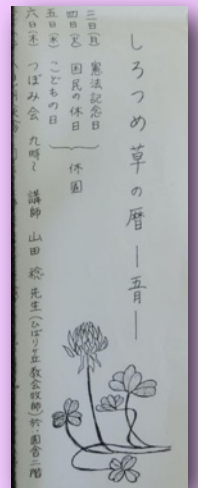


千恵子さんの笑顔の思い出しながら読ませていただきました。翻訳されたアンツカ兄のお気持ちを思います。お証の中の山田稔牧師は私にとっても思い出深い方で驚きました。

30年近く前、息子が通っていた六本木の幼稚園で、先生は月に一度母親の為の聖書の会でお話されました。多くのお母様はクリスチャンでないで、分かりやすく子供と同じお話を大人向け解説付きでされました。また「子供の為の聖書のお話の仕方とその工夫」もご指導くださりました。紙芝居、ペープサート、フランネルグラフなど興味深く私は一生懸命に覚えました。

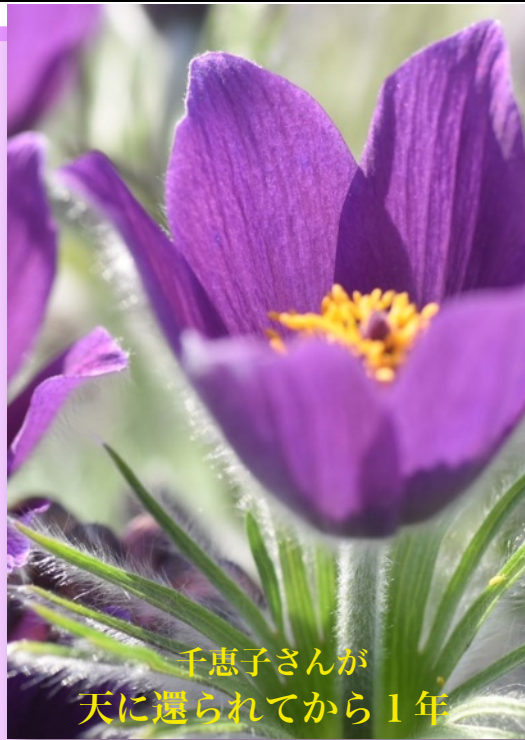
それから10数年が経ち、私たち家族はスイスに来ました。そして幾つかは以前、私がUsterでJEGの子供達に用いさせていただきました。ペープサートで「ザーカイの心の中にある様々な気持ちを全て分って下さるイエス様」と話しました。その後で、田辺みや子先生から「様々な解釈があってザーカイは面白い」と正隆先生と話された、言っていたいただいたのを覚えています。

ヨナは歌と振り付き、一つの紙が船や魚に変わって行く山田稔先生伝授の話は、させていだいたでしょうか?山田先生のお



話は、本当に聴く人の心を捉えました。千恵子さんも聴いたの？とお話しできたら、きっと、楽しかったかなと思います。イスラエルとルーマニアで一緒にいた時にもっとお話ししていたら、そんな話も出たかしら？と思いました。千恵子さんと山田先生から、励ましと慰めをいただきました。たくさん感謝をお二人に申し上げたいです。

もう一つ、千恵子さんに伝えたかった事があります。ルーマニアでの集いの最後、空港での別れ際「佳代子先生がしていた可愛いペンダントは千恵子さんの作？」と私が尋ねたので、彼女は「まだあったかな？」と、ご自分のリュックを探してくださいました。でも「肩こりで首から下げるものは苦手」と別の折に私が言ったのを千恵子さんは覚えていてくださり「ペンダントはダメだっけ」と聞いて下さいましたが、しかし後で下げてみて「紐が皮のような素材なので服の生地との摩擦で重みが分散され首に問題ない。すごい！」と分かりました。



千恵子さんが
天に選られてから1年

人、父は秋田県人、私の本籍は秋田です。私は、舞台もの、クラシック音楽、踊りのバレエなどを見るのが好きです。水泳も好きです。日本では陶芸を大学で専攻しており、ドイツには美術の勉強でシュトゥットガルトに1982年に来ました。

以前は、アントロポソフィーのR. シュタイナー関係のことに深く興味があり、わざわざその一つの中心地であるシュトゥットガルトに来ることにしたのです。精神世界に興味があってニューエイジ関係の本をたくさん読み、インド人のグルの所に訪ねていったこともあります。又、人から良い人に見られたいと願う思いから変に思われていないかと、人の目を気にしてクヨクヨ思い悩みました。私は2002年に、近所のカトリック教会で洗礼を受けました。そのきっかけになった心の

動きを皆様にお分かちしたいと思います。

シュトゥットガルトから小さな町サウルガウ市に引っ越し、とても落ち込みました。というのは、本当は力強く美術制作をするための場所を得るため、田舎に来たのですが、美術を制作する気力もアイデアもパワーもなくなってしまったのでした。自分自身、私はいったいどうしてしまったのだろう、こんなはずではない！と心は悶々として、どうしていいかわからない状態でした。救いをもとめてパワーストーン、アロマテラピーなどもしました。

そんな時、カトリック・ジーセン修道院のシスターに会い一対一でお話しするチャンスに恵まれました。当時、イエス・キリストは偉大な存在であり、聖書も偉大な本であること以上のことはほとんど知りませんでした。

シスターの前では何をしゃべっているのか、自分でもよくわからないくらい毎回泣いて帰ってきていました。そのシスターから「イエスは私の光です」という文章を教えてもらいました。自分で何とかしなくては、この私の心はおかしくなってしまうようで藁をも掴む思いでした。さっそく家に帰って、薄暗い地下の洗濯機の前で「イエスは私の光です」と唱え始めました。すると不思議と心にふっと光がともるような感じがありました。気分が良くなってきたのです。あれっ自分で思いました。そのときイエス様には何かあると思いました。目には見えないですが、生きておられるイエス様が触れてくださったのかもかもしれません。

洗礼を受けたならどうなるのかなーと、希望のような明るさを感じたのです。そして洗礼を受けることにしました。その時は、十字架についても復活についても良くわかりませんで



私は、地元の教会や病院の礼拝堂でスイスの方々に何度も「素敵なペンダント！これは十字架ね。」と言われました。そんな時私は「イエス様を証しされた笑顔のペンダントの作者」のお話をします。千恵子さんにこの事を報告したいですが、いつかこの話の続きはできるのかな？

* イエスは私の光です * Jesus ist mein Licht.

千恵子さんがこの証を書かれたのは、私たちが宣教地日本から戻ってきて、JEGを牧会した時のことでした。2010-2012の間に書かれたはずですが。その時、良くスカイプと一緒に聖書を学んで祈り合いました。千恵子さんの話を聞かせていただき、「ぜひ、それをちゃんと書いて、いつか皆さんに伝えてね。」と励ましました。それで、やっと書いてくださいました。しかし、この証をみなさんに発表したのかどうか覚えていません。この証が千恵子さんの望んだように、イエス様のご栄光のために用いられますように！

ゲルスタ・ウェンディ OMF 宣教師

私は佐々木千恵子クライナーと申します。南ドイツ・サウルガウ市の郊外に住んでおりドイツ人の主人と23歳の一人息子がおります。出身は兵庫県で、3歳から東京で育ちました。母は関西



ゲルスタ・ウェンディ 宣教師と



アッペンツラーランドにて

した。将来の希望もその時点ではゼロでした。もちろん自分の罪についても考えたことはありませんでした。イエス・キリストのことを日本語でもっともっと知りたくて、シュトゥットガルトにある日本語集會に参加しました。

そこで、田辺先生と出会い、メアスブルク集會を紹介していただき、通うようになりました。2003年、ウスターにあるスイス日本語福音キリスト教会の礼拝に誘われ、そこで愛餐会の際、偶然となりに座られたゲルスタ先生に「洗礼を受けたいけれど、まだ十字架も良くわからない。」と話していたら、イザヤ書53章5-6節を教えてくださいました。この聖書箇所はイエス様の十字架の苦しみについてです。

「彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちは癒された。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」

その中の「私たち」を「千恵子」に置き換えることを教えてくださいました。「彼は、千恵子のそむきの罪のために刺し通され、千恵子の咎のために砕かれた。彼への懲らしめが千恵子に平安をもたらし、彼の打ち傷によって、千恵子は癒された。千恵子は、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、千恵子のすべての咎を彼に負わせた。」この箇所はとてもわたくしの心に触れました。いつもその箇所をポケットに入れ、散歩道で涙を流しながら歩きました。と同時に、聖書を読む会の「基礎の学び」をゲルスタ先生の薦めによりメアスブルク集會の原しのぶさんが一緒にしてください、たくさんの重要な聖書箇所に触れました。キリスト教の中心を学ぶことができ、それはそれは信仰の助けとなりました。感謝です。



キリスト者の集い2014 ブリュッセルで

ともかく日本語で聖書が学びたいし、日本語でクリスチャンと神様のことをしゃべりたいので夏の「ヨーロッパ・キリスト者の集い」にも参加しました。神様は「私の心の求め」に応えて一歩一歩私を哀れみ導いてくださいました。私は少しずつ変わっていきました。祈ることができるようになりました。祈ると祈りに応えてくださる神様を体験しています。今までは問題が起こるとぐちぐち悩むだけでしたが、乗り越える方法を学びました。今はまず祈ることができます。そして神様に助けを求めることができるようになりました。



千恵子さんが 天に還られてから1年

こんなこともありました。ある大きな打撃を受け、人を許すことができず2年間くらい暗い雲の中で、自分ではどうにもこうにも動きがとれず、苦しくて寂しくて大変だった時がありました。「神様！この苦しさは、自分の力では、もうどうにもなりません。神様！あなただけが私を助けることができます。どうぞ助けてください」と一緒に祈っていただくことによって、そのしがらみからやっと解かれました。心が軽くなりました。心のトゲ玉がとれました。ハレルヤ感謝です！！

しかし面白いことに、その手放したはずの「過去の苦いトゲ」を自分で再び拾いつかんでいる自分に気が付きはっとしアッいけない！とパッと手から「トゲ玉」を捨てたことが2回ありました。神様が祈りに答えてくださった時は、本当に大感謝です！神を知る

前には知らなかった喜びです。以前は小さなことで悩み、長い時間すっきりしないことが多かったのですが、イエス様に祈ることで、その悩み時間が以前に比べると、とても短くなりました。精神世界のことに嵌っていた私がイエス・キリストを信じるようになったのは奇跡です。それを助けてくださった方々ありがとうございます！！洗礼を受けて本当によかった！と感謝しています。



スイスJEG聖地旅行2017 ヨロッパにて

洗礼を受け10年経ちました。今はイエス様中心の生活で神様に喜んでいただけるように生きています。神様が下さった私の能力を神様のために使いたいです。神様が喜ばれる主のご栄光をあらゆる美術作品をもし作ることができれば本当にありがたいです。神様から希望をもうすでに与えられていることを知りました。皆さんもよかったです「イエスは私の光です」と、心を向けてみてください。イエス様に手を伸ばしてみてください。



岡崎先生



霊とまことを持って礼拝する 真の礼拝者

細木朝子
ウィーン在住

岡崎先生を思うとき、私がまず思い出すのは先生が必ず礼拝前に捧げられたお祈り、『霊とまことを持って礼拝をお捧げします。』（ヨハネの福音書4章23-24節）です。

ウィーンを拠点にされながら、絵画芸術の大家として弛みなく創作活動を続けておられました。その先生の寡黙なお人柄の中に潜む忍耐強さは、ウィーン日本語キリスト教会の柱として、多くの荒波の中で翻弄される教会の中にあって、動かぬ岩のような存在であられました。

1974年秋にウィーン在住の数名の兄弟姉妹で始まった聖書研究会が、1986年の母の日に初めて日本語での礼拝を捧げます。時には司会者、奏楽者、と先生3人の礼拝の時もありましたが『霊とまことを持って礼拝する者』としての先生のお姿に変わりはありませんでした。

そして、1995年には初代牧師石川先生によるご奉仕が始まります。ウィーン日本語キリスト教会10周年記念誌に先生は『なぜ神様は信仰の最も弱いこの小さき者に聖研、そして教会を託されたのかと不思議に思います。』と、謙虚に書かれております。

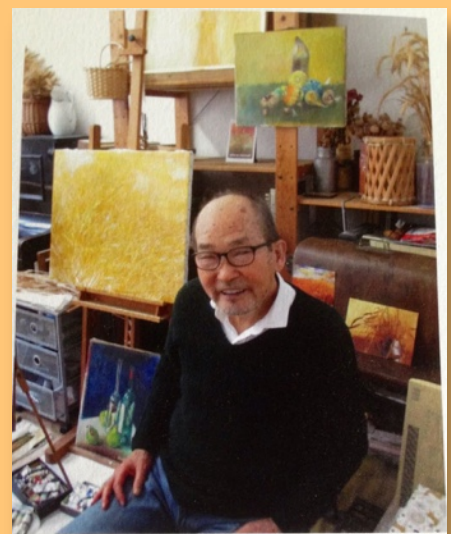
2005年秋には2代目高木牧師が石川牧師の後任に就かれます。岡崎先生は教会25年誌に、『神のことばと人のことば』という題で、『「神のことば」すなわち聖書のことばは、ウィーン教会成立当初より抛って立つところであり、今後も揺るがすことができない不可欠な教会の基本方針であります。……人は舌を制御することはむずかしい。しかし私たちは愛のない言葉や行為によって人を散らす者でなく、神の愛のうちに互いの徳を高め塩味の効いた言葉によって神の愛が教会に満ちているならば、教会は成長し繁栄していくものと信じます。』とのお言葉を残しておられます。

高木先生の10年によるご奉仕の後、教会に嵐が襲います。先生は一時期、日本語教会の礼拝から離れられました。『礼拝を守ることは私の人生の中心です。いろいろありましたが、私は教会内に混乱があったことは神に委ねて全てのことを赦したいと思います。私の信仰の上で最も大切な礼拝を、ウィーン日本語教会で守りたいと思います。』と、再び日本語教会で礼拝を捧げられるのでした。

しかし、Covid-19感染禍により外出規制がしかれ、礼拝もできない状況となりました。そのような時にも、先生は毎日聖書を読み祈りを捧げる生活を続けられ、日曜日には説教をお読みになって、お一人で礼拝を捧げられるのでした。

去年11月末に入院されてからの療養生活で、施設と病院の間を行ったり来たりされました。家族の面会もままならない病院にお一人でいらっしゃる先生のお部屋には、オーストリアのFM放送「ラジオ・クラシック・シュテファンズドーム」の放送が流されていたと、先生を面会された病院で心のケアをするカウンセラーの姉妹がおっしゃいました。そこから流されてくる礼拝の実況放送を、先生はベッドの上で聞かれていたに違いありません。

教会を訪れる方々に優しい笑顔で接して下さり、どのような方にも揺るぎない信頼感を与えて下さり、大きな存在であった岡崎先生は、今は神様のみ国においても『霊とまことを持って』神様を礼拝し続けておられることでしょう。



1965年 東京藝術大学美術学部油画科卒業
1973年 渡米 ウィーン美術大学入学
1975年 同校大学院修了
1980年 オーストリア芸術家協会・キュンストラールハウス会員
2009年 金の月桂樹賞・オーストリア芸術家協会
2018年 紺綬褒章(こんじゅうほうしょう) 文部科学省

岡崎 信吾
Shingo Okazaki
1938年生まれ
ウィーン在住

ウィーンのアトリエにて

岡崎先生



岡崎画伯の思い出

馬場信裕&馬場晶子

ロンドンJCF

ウイーン教会元長老の岡崎画伯が天に召されたのは、イースターまで2週間となった3月21日の日曜日の朝でした。丁度その日ロンドンJCFのオンライン礼拝が岡崎画伯からロンドンJCFに寄贈された黄金の麦の絵『収穫の喜び』（詩篇126:5-6）を背景に捧げられていたのです。



恒例のヨーロッパキリスト者の集いで画伯をお見かけすることはありましたが、個人的な交流が始まったのは2016年からです。2000年ロンドンJCFハウス開所式で50号の『青い麦』

の絵が画伯によってJCFハウスに贈呈されました。その絵が2016年夏岡山県立美術館で開催された『岡崎信吾展』に出展されることになり、信裕はロンドンからお祝いに駆け付けました。絵は展覧会後美術館に寄贈され、所蔵品として未永く保存されることになりました。そこで、その絵に代わりロンドンJCFに新しく絵を寄贈して下さるとい運びになり、私たち夫婦との交流が始まりました。

2016年12月に画伯をロンドンにご招待し、ハウスと我が家に宿泊していただき、ロンドンJCFの委員会と礼拝にも出席されました。市内の美術館や、ロンドン郊外の我が家の近辺をご案内し、終始笑顔でとてもリラックスされたご様子で数日間を過ごされました。画伯は3度目のロンドン訪問にして初めてJCFハウス訪問が実現し、礼拝に出席できたことをとても喜んで下さいました。



その翌年5月には私たち夫婦が寄贈の絵を運ぶためにウイーンを訪ね、アトリエに画伯を訪ねました。数日の滞在中ホイリゲ（ワインの居酒屋）に案内して下さり食事を共にしたり、一緒にモーツアルトの室内楽を聴きに行ったり、次回は美術館を案内すると約束して下さいました。2017年6月には服部牧師の就任式に合わせて来論され、新しい絵の除幕式が礼拝中に持たれました。当時ロンドンJCFもウイーン教会も霊の闘いの真最中にあり、苦しみ、悩む者同士とても通じ合うものがあり、互いにメールで交流し、祈りあってきました。

2020年コロナ禍の中で消息がしばらく途絶えていたのを心配していた矢先、新年早々に介護施設に入居されたとの報をいただきました。海外渡航が可能になったら真っ先にお見舞いとどの願いは叶いませんでしたが、イエス様の十字架の死を通して悲しみが喜びに変えられるイースターを迎え、悲しみの中にも慰めが与えられています。

忠実な主の僕として生涯を送られた岡崎画伯はこの世のすべての悲しみ、苦しみ一切から解き放たれて、あの笑顔と共に『収穫の喜び』を携えて主の御元に引き上げられました。キリスト者としての力と希望の源は復活の主にあることをコロナ禍の中で、画伯の召天を機に再度確信することができました。暗闇が色濃く世界を覆っている今「輝く光」として神様から与えられた使命をもって残る人生の旅路を全うしようと改めて主の前に誓わせていただきました。

